

# エミール

平成25年2月26日  
(通巻第26号)

発行：三重県児童相談センター  
電話059-231-5902

## 初心を振り返って

中勢児童相談所 青木香奈枝

昨年4月から児童相談所に勤め始めて、早9か月が過ぎ、気が付けばもう1年になろうとしています。職場の諸先輩方に毎日ご指導いただきながら、一つひとつ積み重ねています。今回、こうして書き留める機会を頂いたので、どうして児童相談所で働きたいと思ったのか、を振り返ってみようと思います。

一番初めになりたかったものを思い起こせば、ケーキ屋さんだった気がします。理由は毎日ケーキが食べられるから。小学生の時も深く考えずに、漠然と自分の好きなものに関する夢を持っていた気がします。中学生の時、カウンセラーと言う職業に興味を持ちました。「困っている人の話を聞いて力になりたい」と考えたのが、この道を目指し始めた発端となったように思います。

大学生の時に、児童福祉の仕事に興味を持ちました。きっかけは、児童養護施設(以下、施設)で学習支援ボランティアの活動に取り組んだことです。子ども一人ひとりに担当としてボランティアスタッフが付き、週に1回施設に行き勉強を教える形です。私は最初、中学生の男の子(以下、A君)の担当になりました。まずは関係作りが課題で、ほとんどの子どもはなかなか勉強をしてくれません。一緒に夕食を食べたり、テレビを見たり、話をしたり、学校の宿題から取り組んだり工夫しながら学習に向かっているようにします。施設内を逃げ回るので、追いかけてまわすこともありました。次第に家族のこと、自分のことを話してくれるようになり、半年ほどして少しずつ関係もできてきた矢先に、私はA君と会えなくなりました。理由は詳しくは分からないままですが、施設内で問題を起こしたため、この施設を出て行くことになったとだけ聞きました。一度だけ、手紙のやり取りをさせてもらいましたが、それっきりです。時々、A君の様子を職員さんに聞いてはいましたが、彼は中学、高校とずっと生活が落ち着かないまま、今、社会に出て働いているそうです。

私がA君と関わったのはほんの数か月で、一番大変な時に何の力にもなれなかったけ

れど、児童相談所の人を始め、その男の子を支えてくれた人がいることは聞いていました。その後も活動を続け、当時中学生だった子どもたちが高校を卒業し、就職するまで関わり続けることができた子もいました。けれど、一番助けがいた時期に何もできなかった、最初に担当となったA君のことは、ずっと心残りでした。児童福祉に携わる仕事の中でも児童相談所を目指したのは、施設の子どもだけに限らず、支援を必要とする子どもたちと継続して関われると考えたからです。

子ども一人ひとりへの支援を考えた時、児童相談所だけがすべてを担えるわけではありません。市町の職員さんを始め、保健師さん、学校関係者、地域の方、施設の職員さん、里親さんなど、福祉に携わるたくさんの人たちの手を借りなければまわっていきません。そうした、子どもと一緒に見守る方たちとの関わりや連携がとても大切だと実感しています。

社会全体での子育てを考えた時、その社会をつなぐ一つの柱として、今後も子どもたちの支援に携わっていきたいと思います。

### **三重県児童相談所における“真実告知&ライフストーリーワーク”の 取り組み(その8)**

中勢児童相談所 山本智佳央(児童心理司)

前回の『エミール』でも、社会的養護において「子どもの生活史」に積極的に触れる際の課題をご紹介しましたが、今回はもう少し掘り下げて考えてみたいと思います。

大人の側から、子どもの「生活史」を話題にしてみる～児童相談所・養育者それぞれの立場から～

私は、家族と子どもをつなぐ機関である児童相談所が、もっとも自然に「生活史」を話題にできると考えています。児童相談所は施設(里親家庭)に移る前の生活と、移った(措置した)後の生活の両方を知る立場であり、入所(委託)前後のことをしっかり覚えている年齢の子どもであれば自ら昔話を相談所の職員に話してくれることもあります。

児童相談所はこうした立場をもっと積極的に活かすことで、(分断されてしまいがちな)社会的養護の子ども「生活史」を“1本の線”につなぐための支援ができる

のではないのでしょうか？そんなことを思いながら、私たちは真実告知やライフストーリーワークの取り組みを続けています。

これに対して、施設職員や里親が子どもの「生活史」を話題にしにくい事情は前回の『エミール』でご紹介しました。同じ施設に再入所してきた子どもの場合はまた事情が違いますが、新しく施設に来た子どもであれば、一定期間が経過し、そこの施設を拠点として家族との接触・交流を経た上でないと、施設職員の立場では子どもの「生活史」に積極的に触れていくのは難しいかもしれません。

一方、子どもの立場からすると、信頼できる養育者に出会うことができれば子ども自ら「生活史」を語りたい・その大人と「生活史」を共有したい感覚も出てくるようです。しかし、施設生活のように他の子どもたちが常に自分の近くにいる環境では、そんな“打ち明け話”はしにくいというのが子どものホンネでしょう。当たり前のことですが、施設で暮らす子どもたちにとっては職員と2人っきりの場面が一番「生活史」を話題にしやすいようです。こうした心理的な特性を踏まえて、施設職員には子どもたちが「生活史」を話しやすいような配慮や対応をお願いしたいと思います。

里親家庭の場合は、子どもと個別に関わる時間が確保しやすい利点があります。しかし子ども自身が「里子」だと認識している場合はまだしも、告知が済んでいなかったり、委託当時のことを子ども自身よく覚えていないような場合には「生活史」に触れること自体が難しいという事情は、前回の『エミール』でご紹介しました。こうした状況では児童相談所が登場することすらできないので、里親に対応を任せることとなります。このあたりが大きな課題だと感じています。

しかし、子ども自身が『言い出しにくい』という状況から一歩踏み出し、自分の「生活史」を話し出した時が“実親に代わる養育者”として一層の信頼を得た瞬間ということができるようし、また“実親に代わる養育者”としてふさわしい振る舞いが求められる時でもあります。子どもたちの語る「生活史」にしっかり耳を傾けてもらうことはもちろんですが、施設・里親家庭いずれの場合であっても、実親や出身家庭のことを悪く言わない配慮が求められます。

子どもから「生活史」についての話題が語られる位まで子どもとの関係性が進んだとすれば、今の養育者の側から「生活史」を話題にできる(=シェア(共有)できる)環境が整った、ということもいえそうです。「生活史」において子ども自身が気になっていることや、情報が不足していること、子どもが誤解していること等々、子ども

の話す内容から直接確認することができますし、今の養育者として疑問点を感じた時には少し突っ込んだ質問もできるかもしれません。

そして必要に応じて、児童相談所と連携しながら子どもに対して真実告知を実施するといった展開につなぐこともできるでしょう。こうしたやりとりを通じて、分断されがちな子どもの「生活史」を少しずつでも“1本の線”につなげていくという支援が、ライフストーリーワークといえるのではないのでしょうか？

今回は、「生活史」が“1本の線”につながることの意義を考えてみたいと思います。